



リビングルームの大きな壁にインパクトを与えているのは、アフリカのマリ共和国の市場で購入したファブリック。価格はわずか10ドル。そのままキャンバスにマウントしただけだが、美術家の友人ですら「これは誰の作品?」とたずねたほど、立派なアートに变身。モノよりも、21階からのマンハッタン眺めに贅沢を感じるという。

Stylish Upper Westsider in New York



外交官の父親とキューバ人の母親の間にワシントンDCで生まれ、幼少期をヨーロッパで過ごした。大学卒業後、ニューヨークの大手建築事務所に着任。当初は2、3年でワシントンに戻るつもりが、今年で23年目。ここに住んで12年である。はじめは46㎡ほどの広さだったが、2年前に隣の部屋が空き、即購入を決めた。壁をぶち抜き、吹き抜けのスペースを統合して、78㎡になった。以前はアートや本などのコレクションを飾っていたが、独立して仕事が忙しくなるにつれ、生活をシンプルにしたくなった。「家に戻ったら、頭も心もクリアしたい」。それで「モノを置かないシンプル暮らし」が改装の最大のテーマだった。

モノを置かないということは贅沢なことである。そんな矛盾とも思える事実を体現しているのは、自他ともに認めるミニマリスト、ベルモント・フリーマンさんのアップパーウエストサイドにある高層アパートだ。

アイデアを生かし、つくりつけの家具と、モノトーンの色調でシンプルさを強調した。市販アイテムで満足できない場合には、自分でデザインし、徹底的に「自分の望む空間づくり」を追及した。床はテラゾと呼ばれるキューバの建築によく使われる材料である。「母方の血筋の象徴」である床が、もともとお金と手間がかかっているという。ブルーマーブルが作り出す模様は、無機質になりがちな空間に温かみを添えてくれる。しかし、本人の一番の自慢は、2カ所あるバルコニーである。ふたつの部屋を統合して得られた空間だ。南東向きバルコニーでは、朝日を浴びながら、ニューヨークタイムズを片手に起きぬけのコーヒーを飲む。もうひとつはダイニングスペース越しにあり、ハドソン川を真下に望み夕日の眺めがみごとだ。春から夏にかけてはここで夕食を楽しむことも多いとか。

モノを置かないことで心に安らぎを感じ、「マンハッタンを見渡せるここからの眺めは何ものにも代えがたい」と語る。モノより空間。これもひとつの「贅沢」のスタイルである。

目の下にマンハッタンを置くミニマリストの部屋
[建築家] ベルモント・フリーマン



ミニマリストを自称するベルモントさんのアパートは見た目のシンプルさを重視し、最低限のモノしか置いていない。ダイニングテーブルとソファの前の足置きは自分でデザインした。ソファはジョー・シネルソン作。チェアはオランダ人デザイナー、マート・スガンの「カンチレバー・チェア」。カラメッキと黒いレザーがつくり出すシンプルなラインがこの家によく似合う。大理石調で統一したバスルームもすっきりとした印象(右下)。ダイニングの横にある西側のバルコニーは真下にハドソン川を望み、夕陽の眺めがみごと(左上)。

